

社 会 科

大西 弘員・神野若菜・伊藤 公一・田坂 郁哉

I はじめに

これまでは、『グローバル時代をきりひらく資質・能力』を培う教育の創造」というテーマのもと、研究実践を行ってきた。本年度からは、能力ベースで検討してきた社会科授業づくりを、今年度の本校研究主題との関連「社会科本来の魅力に迫るための資質・能力ー社会科授業づくりに必要な各教科等の視点ー」の観点から見つめ直すことが必要である。東雲社会科がめざす社会科授業を明確に示し、小中7年間における東雲社会科カリキュラムの構築をめざす。社会科部では、これまで同様、めざす子どもの姿を以下のように設定する。ここでは、社会科授業において教科等の魅力に迫る子どもの姿（狭義）と、社会科授業を通じた結果としての子どもの姿（広義）に分けて示す。この子どもの姿（子ども像）をめざすための社会科における教員の資質・能力とは、どのようなものであるのかについて明らかにしていくことを目的とし、研究を進める。

- 学習を通して身につけた社会の見方を、日常の社会生活の事象や問題に照らし合わせて考えながら、学習する意味や価値を実感できる子ども（狭義）
- 学習を通して身につけた社会の見方・考え方を総動員し、身近な日常生活の問題や社会問題を考え解決しようとする子ども（広義）

II 社会科本来の魅力に迫るための教員の資質・能力

1 教科教育としての「社会科本来の魅力」や「社会科を学ぶ意義」

社会科は、その名のごとく、私たちが暮らす「社会（民主主義社会）」を学ぶ教科である。戦後、民主主義社会を日本に形成するため、アメリカのバージニアプランをベースに学習指導要領（試案）が構成されたことに由来する。このバージニアプランは、社会科を中心とした「民主主義社会」の一員を育むコアカリキュラムの形態をとっている。そのため、現在でも学習指導要領や社会科では、子どもたちに民主主義社会の一員として公民的資質を育成することを目標として示している。また、社会科は「Social studies」と示すように、地理学や歴史学、経済学などの社会諸科学の成果を踏まえた教科と言える。故に、社会科で習得する教育内容は、社会諸科学の成果につながる知識・概念であり、これを我々が暮らす民主社会を知りわかる上でのスコープ（視点）として活用し、社会の仕組みをとらえたり社会問題について考えたりする手立てとする。さらにそれを基に、様々な社会事象に対して自らの考えを踏まえ価値判断・意思決定したり、未来予想したりすることもできる。

このように、社会科は社会諸科学の成果をベースに、様々な社会事象を多面的にとらえながら、社会的な課題や問題を主体的に考え、仲間とともに協働的に解決する。この学習過程は、社会科の教科における特性であり、まさしく社会科授業を通してクラスという小さな民主主義社会を形成し、社会の一員としての資質・能力を育むことのできる、最も実践的で効果的な教科と言えよう。

社会科は、子どもが学級という小さな民主主義社会で、社会諸科学の成果をベースに、様々な社会事象を多面的にとらえながら、社会的課題や問題を主体的に考え、仲間とともに協働的に課題解決していく、社会の一員としての資質・能力を育む上で最も実践的で効果的な教科（仮説）。

2 社会科本来の魅力に迫るための教員の資質・能力

近年のグローバル時代における社会問題は、既存科学の範疇だけで解決できない場合が多い。そのため、これまでトランスサイエンスの観点を踏まえ、様々な立場から子どもに育むべき資質・能力が提言され、それらを効果的に育むための方法的研究が盛んに行われてきた。社会科が地理学や歴史学、経済学などの社会諸科学の成果を踏まえた教科であることを考えると、社会科学という領域の中ではあるが、ある意味トランス的な要素を踏まえた教科（学問）と言える。

内容教科である社会科は、子どもの社会認識を通して公民的資質を育成する教科である。つまり、社会の見方となる一般性のある知識・概念（内容知）の獲得を通して、資質・能力（方法知）を育む。そ

のため、社会科では「社会科本来の魅力に迫るための教員の資質・能力」を吟味・検討する上で、児童・生徒の社会認識形成を切り離すことはできない。能力ベースの方法論に特化した研究は、「這い回る社会科」や道徳の範疇に留まる可能性がある。また、社会科本来の魅力に迫るための教員の資質・能力を考える上で、子どもたちが将来トランスサイエンス的な見方・考え方による協働的な市民的行動を芽生えさせるためには、まずはその種蒔きとして、義務教育段階での社会科固有の認識や資質・能力を育成しておくことも必要と考える。

3 社会科本来の魅力に迫るための教員の資質・能力の具体

表 社会科本来の魅力に迫るための教員の資質・能力の具体

資質・能力	視点	資質・能力の具体
授業構想力	目標設定	<ul style="list-style-type: none"> ・「持続可能な社会」に向け、公民的資質を兼ね備えた児童生徒の育成を目指した目標を設定する力 ・児童生徒が学習した内容を、日常の事象に関連付けたり、身近に感じたりすると共に、「当事者意識」を持ち自分ごととして捉え、「学んだことを実生活に落とし込むことのできる」目標を設定する力
	教材研究（開発）	<ul style="list-style-type: none"> ・教員が教材研究した過程を、児童生徒が追体験できる場面を設定する力 ・児童生徒の社会的事象に対する意欲・関心と、それに基づき、児童生徒の学びにつなげる力 ・児童生徒の視点に立って、「わからない」を前提とした授業作りを行う力 ・学習した内容を児童生徒が「多面的・多角的」に思考できる場面を設定する力 ・児童生徒の実態に応じて、授業改善する力
授業実践力	指導技術	<ul style="list-style-type: none"> ・板書によって学習内容を視覚化し、思考を整理する力 ・児童生徒が思考する際に、ICTを活用したり、複数の異なる資料をタイミングよく提示したりする力 ・児童生徒の思考の過程を、共通認識・全体共有することのできる力
授業分析・評価力	授業分析評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ルーブリックに基づいた形成的評価の実施する力 ・児童生徒の変容について、常にノートや発言から見取り、「単元を貫く発問」にどれだけ迫ることができているか振り返ることのできる力

Ⅲ 本年度の研究総括

1 研究の目的

授業づくりに必要な社会科における視点について考察することを通して、「社会科本来の魅力に迫るための教員の資質・能力」について考察する。

2 研究の方法

- ・社会科本来の授業づくりに必要な視点をもとに、小学校および中学校の授業開発、実践、考察を行う。
- ・「社会科本来の魅力に迫るための授業づくりのあり方、およびそのために必要な教員の資質・能力について検討する。

【参考文献】

- 安彦忠彦 (2014) 『コンピテンシー・ベースを超える授業づくりー人格形成を見すえた能力育成をめざしてー』 図書文化.
- 石井英真 (2015) 『今求められる学力と学びとはーコンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影ー』 日本標準.
- 石井英真 (2017) 『小学校発 アクティブ・ラーニングを超える授業ー質の高い学びのヴィジョン「教科する」授業』 日本標準. 岩田一彦 (1994) 『社会科授業研究の理論』 明治図書.
- 内山節 (2014) 『主権はどこにあるかー変革の時代と「我らが世界」の共創』 農文協.
- 木村博一 (2002) 「初等社会科教育学の構想」『初等社会科教育学』 協同出版, pp. 5-14.
- 木村博一 (2006) 「新しい学びにもとづく社会科授業開発の基礎基本」 社会認識教育学会編『社会認識教育の構造改革-ニュー・パースペクティブにもとづく授業開発-』 明治図書, pp. 144-149.
- 木村博一 (2015) 「社会の見方や考え方を育てる社会科」 日本教科教育学会編『今なぜ、教科教育なのかー教科の本質を踏まえた授業づくりー』 文溪堂, pp. 43-49.
- 新谷和幸・中丸敏至・松岡靖・沖西啓子・伊藤公一・木村博一・永田忠道 (2014) 「グローバル社会に対応した国家・社会の構造を認識する社会科授業開発ー附属小学校 3 校の共同研究の成果としてー」『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』 第 42 号, pp. 57-66.
- 新谷和幸・中丸敏至・伊藤公一・服部太・沖西啓子・木村博一・永田忠道 (2015) 「文化に焦点化した『グローバル社会学習』の授業開発ー附属小学校 3 校の連携を生かしてー」『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』 第 43 号, pp. 153-162. 新谷和幸 (2015) 「グローバル化する社会をとらえ児童に公民的資質を育む授業とは」 第 64 回全国社会科教育学会全国研究大会課題研究 I (3) 発表資料.
- 新谷和幸・中丸敏至・伊藤公一・服部太・沖西啓子・木村博一・永田忠道 (2016) 「グローバル化する環境問題に焦点を当てた『グローバル社会学習』の研究ー附属小学校 3 校の連携を生かしてー」『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』 第 44 号, pp. 159-168.